

批評と紹介

浙江省社会科学院歴史研究所・経済研究所、嘉興市図書館

嘉興府城鎮經濟史料類纂

山根 幸夫

本書は浙江省社会科学院歴史研究所、経済研究所および嘉興市図書館の共編になるもので、編纂工作に参加したのは陳学文・鄭紹昌・張振維・榮志榮・陶誠益の五氏である。鄭紹昌氏が碑刻資料および文献資料の一部を編修、陳学文氏が全体の編修を担当した由である。

本書の構成は大別して二篇より成り、甲篇は文献資料、乙篇は碑刻資料であるが、前者が全体の八五%を占める。更に付録(別冊)として「嘉興府及各県皇城沿革表」「元・明・清嘉興府各県市鎮表」「嘉興府県鄉鎮方志目錄」を収めている。

最初に、杭州大学の陳橋駅教授の序文があり、スキナー教授の『中華帝國晩期の都市』や京大人文科学研究所の『中

国近世の都市と文化』等を引用し、都市研究の重要性を述べている。なお、冒頭には拙稿「中国中世の都市」が引かれているのには吃驚した。

次に陳学文氏の詳しい「前言」が掲げられている。陳氏は最初に「わが国經濟改革工作の展開に随つて、城市改革の歩調を加速し、城鎮建設を強化することが、目前の緊急任務である」「城郷經濟發展の需要に適應し、城郷の物資交流を促進し、城鎮の經濟建設の作用を發揮する為には、必ず城鎮の(歴史)發展過程を研究し、歴史の經驗を汲取し、わが国の城鎮建設の好伝統を發揚しなければならぬ。此によつて、城鎮史の研究は重大な現実的意義と學術的価値を有するものである」という。陳氏のいう如く、本書編纂の意図はただ学問的興味だけでなく、現代中国の現実的課題を担っているわけである。

以下、陳氏の所説を要約しながら紹介してみたい。江南は先進經濟地域であるが、嘉興地区は明清以来、江南(狹義には蘇州・松江・常州・嘉興・湖州の五府)經濟地域の中でも突出した地位を占めていたから、江南デルタの經濟發展の特徴をよく反映している。それ故、この地域の城鎮史に関する研究は、我々に普遍性をもった認識を提供することができる。加之、嘉興は現存の文献資料が極めて豊富で、研究工作の進行に便利であるから、編者達は本書の編

纂に取りくんだという。

次に、陳氏は嘉興の市鎮に関する概観を試みる。市鎮の類型は、大別すれば次の四種になる。(1)府県市(行政機構の所在地)、(2)專業市鎮(商工業匯集の場所)、(3)農業副産品集散の市集、(4)墟市(往々定期の市集の性質を有する)に分けられる。元代には嘉興府内には二市鎮があり、明代には三五、清代には四四に増加した。

さて、此等の市鎮の形成されていく過程を、次の六種の類型に分類する。(1)世族・士夫の聚居地から発展して市鎮となる。(2)官吏・世族の巨室大家が商人を招集して、次第に市鎮に発展する。(3)駐兵の重地、軍事要塞より発展する。(4)榷塩酒稅務の機構を設けてから発展する。(5)交通改道より発展する。(6)一旦事によって荒廃したが、再び振興して発展する。以上の他に、更に多くの市鎮がもともと草市などから発展したことを指摘する。

市鎮構造の階層的区分については、スキナー教授は三級に分け、中央市鎮・中間市鎮・標準市鎮としてゐる。台湾の李国祁氏は伝統的な政治機構を以て五級に分類し、省城・府城・州县城・鎮と市・定期市とする。市鎮の經濟機能によつて、生産性市鎮、流通性市鎮、消費性市鎮に分ける者もある。此等の区分は採るべき点もあるが、完全にわが国市鎮の特徴を概括していると言うことはできない。そ

こで、陳氏は嘉興府の市鎮に即して、行政性の市鎮と經濟性の市鎮に大別する。

行政性の市鎮とは、各級政權(府州県)の所在地を指す。次に經濟性の市鎮(專業)は、更に三種類に分ける。而して嘉興府内の市鎮を具体的に例示する。

(1)手工業專業市鎮(生産と販売)

糸織業……濮院鎮、王江涇鎮、青鎮、王店鎮、新塍鎮
綿織業……魏塘鎮、鳳涇鎮、王店鎮
建築器材・日用品……千家窑鎮、陶莊市
五金用品業……爐頭鎮

竹器加工業……陳莊鎮

油漆工芸・玩具生産業……斜塘鎮

(2)農業副産品加工業市鎮(生産と販売)

蚕桑・原糸販売業……青鎮、石門鎮

油料加工業……石門鎮

糧食販売業……新塍鎮、濮院鎮

生姜販売業……新豊鎮

塩業生産業……鮑郎市

(3)交通要衝市鎮

陸路……王江涇鎮、半邏市、石門鎮
水路(運河)……皂林鎮、王江涇鎮、陡門鎮
海港兼外贸港口……乍浦鎮、澈浦鎮、広陳鎮

此等の市鎮の中には、單一機能のものと、複数の機能を有するものがある。例えば、濮院鎮は糸織業が多く、また米糧店も多い。

次に、市鎮經濟を發展、勃興させた三点の具体的要因を挙げる。(1)城鎮商品經濟の發展。付近農村に産する手工業原料が市鎮に集中して、技術加工を進行させ、市鎮の手工業生産を發展させて、漸次手工業專業市鎮を形成した。(2)商業市鎮。商品生産の發展に伴ない、円滑な商品流通ルートを發展させ、城郷の商品が大量に一個の交通便利な地方に集中して交換を進行させ、此処に行商・坐賈を吸収して商業を經營させ、ある者は前店後坊とし、手工業者も作坊を開設、自産自銷し、ある者は農業副産品の貿易市場となった。斯うして商品販売の市鎮が發展した。(3)交通・流通の發展。航路・駅路の水産兩運の地方は、往々商品流通の商業を發展させ、同時に軍旅・客商の需要に応じ、服務性行業を發展させ、交通要衝型の交通市鎮、或いは商品流通中心の市鎮となった。この他にも、若干の市鎮は、或種の工藝品を生産することによって興起した。例えば、曹王廟鎮は泥塑生産によって市鎮となった。

それでは、嘉興市鎮の經濟構造上における特徴はどのような点であろうか。(1)若干の市鎮は經濟基本上、農業とは分離し、手工業或いは商業を以て主とする專業市鎮となつ

た。經濟成分中における商業經濟が、自然經濟に比べてずっと重要な地位を占めていた。陳氏は濮院鎮を以てその代表的な例に挙げている。(2)若干の市鎮の經濟構造中には、既に資本主義の萌芽が見られた。それらは封建經濟の垣根を突破して、封建制とは相反する方向への發展を開始した。(3)若干の市鎮は、兵燹その他の外力の衝擊を受けたが、速かにその機能を恢復して、豊かな生命力を發揮した。例えば、王江涇鎮・烏青鎮・陡門鎮などがそれである。(4)人口構造の特徴は、農村の中の過剩労働力を吸収して、市鎮の雇傭労働者に転化し、漸次彼等を市鎮居住の構成人員に改変した。

農村の商品生産の發展は、商業性農業の増長を促進し、市場との關係を強化し、自然經濟の頑固な堡壘に衝擊を与えた。農民層の分化は加速化し、生産手段を喪失した自耕農は雇傭労働者となり、農村に残留した一部の者が日工・短工・忙工に従事した他、人口稠密の江南農村では、多数の剰余労働力を收容することはできず、結局彼等の出路は市鎮に入つて、手工業労働の大軍の中に加わるか、交通運輸・商業、或いはサービス業の列に加わるしかなかった。斯くして、城鎮は農村の過剩人口を吸収して迅速に發展した。

明清以來、嘉興一帯の人口密度は頗る高くなり、賦役負

担も重くなったので、農民層の分化もはげしかったが、多数の流民が出現することもなく、又失業人口が暴動を起したり、或いは流民が民変を起こすこともなかった。その理由は、嘉興地区では城郷商品経済が著しく発展していたから、城鎮は多数の農村余剰人口を収容することができ、過剰人口の圧力を削減して、この様な矛盾を緩和できたからである。

最後に、嘉興地区の城鎮の構造と配置上の特徴を、次の如く要約している。

(1) 市鎮は沿河に布置するものが多く、一つの線形の構造を形成した。嘉興地区は水運網が密布しており、交通は水運を主としていた。多くの市鎮は沿河に分布し、線形を成していた。嘉興の市鎮は水とは不可分の関係にあり、多くの市鎮は塘・涇・激・瀝・浦・湖・匯・洲・蕩・陡門などと名付けられていた。

(2) 市鎮は既に一つのネット・ワークを形成しており、相互に一定の距離間隔を保持し、商品の流通と城郷経済の交流に便にした。一般に府県市、或いは中心の稍々大きな市鎮を中心として、四方に向かって輻射し、一つの環形の市鎮網を形成していた。市鎮の分布は物産、交通、特に城郷商品経済と密接な関連があった。嘉興地区は多くの蚕桑、糸綯、糧食流通等と甚だ大きな関連があった。なお、住民

の市鎮へ赴く時間は、往復三時間ばかりであった。交通の便利と市鎮の密布により、嘉興地区では市集（定期市）は殆ど見られず、浙東一帯とは大きく異なっていた。商品経済の発達の不十分な地区では、商品交換の場所としての市集が必要だったのである。

(3) 占有面積上では或る市鎮は、既に府県城を超過していた。従来、建城の規模には一定の規格があり、省府県の三級の城牆の占有面積には厳格な規定があった。然し、明清以降経済発展によって成立した城鎮には定制がなかったので、面積および人口の面で、三級の城鎮を超過する現象があらわれた。

(4) 文化施設も市鎮に多く設けられ、市鎮は漸次文化の中心となった。経済の繁栄、交通の便利によって、世族名士が好んで城鎮に聚居したので、書院・寺院が林立し、文人学士が輩出した。例えば、濮院鎮では進士が宋代に四名、元代に二名、明代に九名、清代には一名出ている。又、烏青鎮については、次の如き表を掲げている。

科第	朝代		
	宋	元	明
進士	一七	一	九
舉人	二二	〇	一八
			六三

明清時期、嘉興の市鎮は社会経済の発展に甚大な作用を

起したが、それは大中城市と広大な農村との連絡の枢軸であった。城郷経済交流のルートは、農村手工業原料や農業副産物を城鎮にもたらし、又大中城市と城鎮の商品を郷村に輸送し、城郷商品経済の発展を推進した。漸次、自然経済の商品経済へ向つての発展を促進し、従つて自然経済の前線陣地を瓦解させた。資本主義生産因素は此処でまず萌芽を獲得した。嘉興の経済発展は全国先進地区であつたが、それは多数の市鎮の存在と関係があつたわけである。

以上が、陳学文氏の「前言」の要約であるが、多分に図式化された傾向はある。然し、具体的な史料に基づいて、嘉興地区の市鎮の存在形態とその発展の過程を詳細に考察し、分析された功績は多としなければならぬ。資料部分を閲読するに当つて、極めて有益な参考になるものと言えよう。

次に甲編「文献資料」は、上は古代から下は一九一一年までの資料を取めている。本書に資料を取める地域範囲は、『明一統志』に列する一府七県、即ち嘉興府・嘉興県・秀水県・嘉善県・海塩県・平湖県・崇徳県・桐郷県であり、この順序によつて資料を配列している。なお、康熙年間に崇徳県は石門県と改められたが、本書ではその儘崇徳県としてゐる。

嘉興府の場合は、(一)建置(①沿革、②形勝、③地形)、(二)

規模(①四至八到、②坊巷)、(三)人口、(四)物産、(五)交通、(六)手工業、(七)商業、(八)賦役に分類して、資料を整理している。各県の場合も大体之に準ずるが、大体(一)建置(①沿革、②市鎮嬾変)、(二)規模、(三)人口、(四)物産、(五)交通(運輸)、(六)手工業、(七)商業貿易、(八)賦税、(九)社会組織の順序で資料を配列している。各県によつて多少の差異もある。なお、海塩県の場合には市鎮を建置の条に置かず、最後に配列し、特に澈浦鎮、沈蕩鎮については、県の場合と同様に、建置・規模……に分けて叙述している。同じく平湖県の場合も最後に配し、乍浦鎮、広陳鎮については、県と同様に資料を分類している。社会組織の条には、会館公所や廟の事が採りあげられているが、記事は多くない。

本書の引用書籍は、『明一統志』、『天下郡国利病書』、『説史方輿紀要』、『古今圖書集成』職方典をはじめ、府志、県志、郷志、鎮志、里志などの地方志を中心に、『湧澗小品』、『補農書』、李日華『紫桃軒雜綴』、『紫桃軒又綴』、張瀚『松窓夢語』、孫嘉淦『南游記』、張岱『陶庵夢憶』、姚叔祥『見只篇』、朱彝尊『曝書亭集』、沈廷瑞『沈畚雜記』、『万宝金書』など、実に広範囲にわたっている。その博搜ぶりは特筆に価すると言えよう。

編者は資料の取扱いについては、周到な注意を払っている。例えば、地方志の叙述は常に輾転踏襲する現象が見ら

れるが、編者は極力最も早い出典を求めている。原資料に注のある場合にはその儘留め、編者が注を加えた場合には「編者注」と区別している。同一の資料が多方面の問題に涉る場合、それを分割して使用できる場合には分割し、然らざる場合には、二カ所或いは三カ所に重複して収録している。なお、本書の資料は異なる時代、異なる階級・階層の手になるので、その中には明白な階級的偏見を帯びるものもある。例えば、太平軍を「賊」、「寇」と記し、その破壊性を誇張するなど、事実と反する箇所もある。然し、原形を保存する為に批判、改正を加えなかつたので、閲読の際には注意してほしい、と編者は断わっている。

次に、乙編「碑刻資料」であるが、最初に鄭紹昌氏（經濟研究所）と張振維氏（嘉興図書館）の説明が付されている。本書に収録した碑刻は四六件あるが、その中宋代が三件、元代が二件、明代が一二件、清代が二九件ある。此等は各文献中より抽出したもの、各地に分散する原碑より直接採録したもの他、嘉興市図書館の館蔵拓本を利用したものが最も多い由である。それらの拓本は、一九三六年館長陸仲襄が人に請うて拓製させたもので、三百余件に達する。此等の拓本は必ずしも良拓ばかりとは言えないが、原碑が既に破壊されたものもある現在、陸仲襄館長の功績は多大である。

此等の拓本は宋元のものも若干あるが、大多数は明清のものである。拓本の史料価値と学術的意義は頗る大きい。百工、商人は言わずもがな、厨司・脚夫・傭婦より乞丐に至るまで、碑刻に登場している。正史その他の文献資料には殆ど見出せないものである。その内容も、政治・経済・軍事・文化・芸術・教育・倫理・道徳・風尚など万般に亘っている。

本書に収録されている宋代および元代の碑刻題名を掲げると、次の如くである。

嘉興大市官街磚銘（嘉泰元）

重修土地廟記（嘉定四）

宋故宗姬趙氏墓碣（嘉定一五）（以上宋代）

嘉興路資聖禪寺長生修造局記（至治元年）

海寧州安民碑（至正一九）（以上元代）

碑刻資料は全文を収録せず、部分的に節録したものが多し。城鎮經濟史料という本書の編集方針に即応するためと、更に紙幅を節約するための抄録である。うが、本書を通じてしか此等の碑刻に接することのできない我々にとっては、是非全文を掲載してほしかったと思う。假令、城鎮經濟に關係のない部分も、色々我々の参考になる点が多い筈である。

さらに、編者は二百余件の拓本の中から、本書に収録す

るものを選択したわけであるが、残された拓本も多数あるわけである。筆者の希望として、嘉興に現在する原碑・拓本全部の碑刻資料集を是非編纂して頂きたい。文献資料は我々外国の研究者も何とか博搜できるかも知れないが、碑刻資料を閲読することは不可能なのである。現在各地で碑刻資料の編修・刊行が活発であるが、嘉興でもぜひ碑刻資料集を出版して頂きたい。

最後に付録(別冊)であるが、これは表になっている為、本文と同一の判型に組みこむことができず、別冊(B5判)になったようである。最初の「嘉興府及各県城沿革表」は、秦以前及秦・漢・三国晋・隋唐五代・宋・元・明・清に分けて表示している。次の「元明清嘉興府各県市鎮表」は、元・明・清各時代における各県ごとの市鎮を明示している。最後の「嘉興府志・県志・郷・鎮・圩志目録」は、『中国地方志聯合目録』(一九七八)に基づいて摘録、並びに洪煥椿『浙江方志考』を参照して編纂したものである。現存方志を規準とし、存目方志は除いている。

右の如く、付録を別冊にせざるを得なかった理由はわかるが、別冊(判型を異にする)であることは、利用の上でも保存の上でも非常に不便であることを付記しておきたい。

本書は浙江経済史料叢編の一冊として刊行されたよう

ある。恐らく、この様な形で次々に史料集を続刊する計画が、浙江省社会科学院では立てられているのであろう。筆者は有益で便利な史料集の続刊を期待すると共に、この工作に従事している浙江省社会科学院の研究員各位の努力に感謝を捧げたい。

(一九八五年三月、浙江省社会科学院出版、B6判四三五頁、付録、B5判二六頁)

ウイリアム・ウエイ

中国における反革命

——ソビエト期江西での国民党——

弁 納 才 一

一九三〇年代、国民党が、江西省で中国共産党(以下、中共と略称)との対決(いわゆる囲剿戦)を通して、あるいは、囲剿戦勝利後にかなる建設事業を行なったのかということについては、従来の革命史一辺倒を反省しつつある中国でも、また、南京政府の見直しが力説されて久しい日本でも、ほとんど研究されることなく今日に至り、これに関する研究は、専らアメリカで進められてきた感¹⁾が強い。よって、ここに本書を紹介することは、近年のアメリカの